2019年10月28日(月) 日本海新聞

日々往来

柿と短観

福永 憲高

今が最盛期の柿は「食のみやこ鳥取県」を代表する果物のひとつ。梨とともに輸出されているが、柿は海外でも「kaki」で通じる。同様に日本語のまま海外でも通じる言葉に短観（Tankan）がある。

短観というのは、日銀が四半期ごとに実施している統計調査「全国企業短期経済観測調査」のことで、景気動向を分析する際の重要な材料のひとつとなっている。日銀松江支店が先日発表した山陰地方の短観によれば、企業の業況感を表す業況判断DI（ディーアイ）は3カ月前の調査と同水準となった。

日銀では現在、「わが国の景気は、基調としては緩やかに拡大している」と判断しているが、当然、地域によって差があり、業種や企業規模によっても差がある。それらをまとめて「景気は―」とひとことで言うのはなかなか難しい。

そこで企業の皆さんに業況を伺ったのが、短観の中でも注目度が高く、ニュースの見出しを飾ることが多い業況判断DIだ。

大阪の人に景気が良いかどうか「もうかりまっか」と聞くと、絶好調でも絶不調でも「ボチボチでんな」と返ってくるらしい。短観では「もうかりまっか」ではなく、収益を中心とした全般的な業況について伺っている。回答は「ボチボチ」では実態が分からないので、「良い」「さほど良くない」「悪い」の三つから一つを選んでもらう。「良い」と回答した企業の割合から「悪い」と回答した企業の割合を引いたものが、短観の業況判断DIだ。

次回の短観の発表は12月中旬の予定だ。消費税率引き上げ、米国の政策運営や保護主義的な動き、中国をはじめとする新興国の動向などが景況感にどのような影響を及ぼすか注目される。（日本銀行鳥取事務所長）